回廊隅部の架構の検討

－第一次大極殿院の復原研究26－

1　はじめに

これまでの第一次大極殿院復原研究で、回廊の構造形式については、現存建築、絵画資料等の検討成果から、棟通りに築地を備えた複廊形式の築地回廊で、三棟造の化粧屋根裏をもち、組物は実肘木なしの平三斗、架構は虹梁蟇股、隅部の屋根形式は寄棟状に復原した。三棟造の複廊形式のため、築地の外と内の隅部では、直交する化粧棟木の交点を支持する方法、および架構部材の納まりが課題となる。本稿では、現存する回廊の類例から、上記の課題について検討する。

2　回廊隅部の架構

現存する古代の回廊および類似例は、法隆寺西院廻廊と平等院鳳凰堂翼廊に限られる。そのため、検討対象とする類例の年代を近世までとし、棟木の交点の支持方法は単廊でも参考となることから、複廊だけでなく単廊も対象に含める。古代から近世までの重要文化財指定の回廊のうち、隅部をもち、修理工事報告書や実測図等から架構の様相がおよそ判明する類例は、計17例ある[1)]。これらを、隅部における棟木の交点の支持方法で分類すると、次のＡ～Ｄ型の４つに分けられる（表２）。

Ａ　型　一方の棟通りに虹梁を架け、その中央に束を立てて棟木の交点を支持する方法。法隆寺西院廻廊と東照宮廻廊の西廻廊折曲り部にみられる。いずれも単廊で、隅の屋根形式は寄棟状である。

Ｂ　型　隅行方向に虹梁を架け、その中央に蟇股または束等を置き、棟木の交点を支持する方法。単廊では平等院鳳凰堂翼廊をはじめとする９例、複廊では春日大社本社廻廊にみられる。隅の屋根形式は、寄棟状と入母屋状とがある。この類型に該当する事例には、化粧棟木を支える部材に一つの傾向がみられる。すなわち、標準断面で化粧棟木を支える部材が蟇股または大瓶束の場合は、隅行虹梁上でも同様であり、叉首や豕叉首の場合は、隅行虹梁上では束とする。

Ｃ　型　直交する棟木のうち一方の端部を、側柱筋まで延ばして支持する方法。単廊では伊佐爾波神社廻廊と瑞龍寺廻廊、複廊では石清水八幡宮廻廊にみられる。隅の屋根形式は、いずれも入母屋状である。

Ｄ　型　棟通りに柱が立ち、棟木の交点の支持に問題が生じない方法。三棟造でない複廊で、延暦寺根本中堂廻廊と京都御所廻廊にみられる。隅の屋根形式は、いずれも寄棟状である。

各類型の検討　奈良時代までの事例は、Ａ型の法隆寺西院廻廊のみである。類例中、もっとも多いのはＢ型である。Ｃ型は入母屋状の屋根形式と直接関わる構造であり、Ｄ型は三棟造としない複廊の構造である。したがって、Ｃ型とＤ型は、第一次大極殿院の回廊とは前提とする条件が異なり、参考にし難い。

隅部の架構の復原　以上の検討により、第一次大極殿院の回廊隅部の架構には、Ａ型もしくはＢ型が考えられる（図９）。Ａ型とする場合は、虹梁の一方の端部で蟇股と干渉する問題がある。Ｂ型とする場合は、平安時代の平等院鳳凰堂翼廊よりも遡る実例がない問題がある。

現存する回廊の類例をみる限り、時代性からＡ型の方法が考え得る。しかし、回廊でなくやや時代も降るが、唐招提寺金堂では隅行虹梁が用いられており、Ｂ型の方法も建築技術史的観点から、奈良時代前半に存在したと考えることは可能である。また、直接的な参考事例になる、三棟造の複廊である春日大社本社廻廊の隅部の架構もＢ型である。よって、築地回廊の隅部の架構は、Ｂ型の隅行方向に虹梁を架ける方法と考える。

3　架構部材の納まり

隅行方向に虹梁を架ける場合、特に入隅および築地心隅での組物と虹梁の納まりが問題となる。そこで、前述した17例のうち、隅部で３本以上の虹梁が集中し、かつ第一次大極殿院回廊と同じく虹梁を大斗で受ける事例の部材の納まりを、修理工事報告書や実測図、現地での調査成果により検討する。対象となるのは次の４例である。

平等院鳳凰堂翼廊では、入隅は隅行虹梁と梁行虹梁を相欠きで組み、隅行虹梁鼻（鼻＝端）は外部に出ず、梁行虹梁鼻は肘木を造り出すとみられる。

法隆寺東院廻廊では、入隅は隅行虹梁の側面に、梁行虹梁とみせかけの肘木が取り付くとみられる。

春日大社本社廻廊では、入隅と中柱筋隅は、隅行虹梁の側面に梁行虹梁とみせかけの肘木が枘差しで取り付

表２　回廊隅部の架構

分類	名称	所在地	建立年代		形式	梁行柱間数	柱間（m）桁行（標準寸法）	梁行	架構 標準断面	隅の虹梁上の部材	隅部の虹梁を受ける材	隅部の屋根形式
A型	法隆寺西院廻廊	奈良	飛鳥時代		単廊	1	3.703	3.703	虹梁・叉首	束	側桁・虹梁	寄棟
	東照宮廻廊（西折曲り）	栃木	寛永13年	1636	単廊	1	2.709	3.212	虹梁・大瓶束	大瓶束	三斗組・虹梁	寄棟
B型	平等院鳳凰堂翼廊	京都	天喜元年	1053	単廊	1	2.424	3.636	二重虹梁蟇股	蟇股	**大斗**	—
	法隆寺東院廻廊	奈良	嘉禎３年	1237	単廊	1	2.727	3.648	虹梁・蟇股	蟇股	**大斗**	寄棟
	油日神社廻廊	滋賀	永禄９年	1566	単廊	1	2.424	3.942	虹梁・蟇股	蟇股	側柱	寄棟
	厳島神社廻廊	広島	永禄６年～慶長７年	1563～1602	単廊	1	2.576	3.939	虹梁・豕叉首	束	肘木のような材	寄棟
	北野天満宮廻廊	京都	慶長12年	1607	単廊	1	2.424	3.939	虹梁・蟇股	蟇股	大斗肘木	寄棟
	春日大社本社西及び北御廊	奈良	慶長18年	1613	単廊	1	2.121	3.030	虹梁・豕叉首	束ヵ	—	寄棟
	東照宮廻廊（正面隅） 東照宮廻廊（東折曲り）	栃木	寛永13年	1636	単廊	1	2.709	3.212	虹梁・大瓶束	大瓶束	三斗組	入母屋 寄棟
	東大寺廻廊	奈良	正徳６年～元文２年	1716～1737	単廊	1	4.642	5.924	虹梁・豕叉首	束	枠肘木	入母屋
	鶴岡八幡宮上宮廻廊	神奈川	文政11年	1828	単廊	1	2.424	3.576	虹梁・蟇股	蟇股	枠肘木	入母屋
	春日大社本社廻廊	奈良	慶長18年	1613	複廊	2	2.460	2.430	虹梁・蟇股	蟇股	**大斗**	寄棟
C型	伊佐爾波神社廻廊	愛媛	寛文７年	1667	単廊	1	2.009	3.940	虹梁・箕束	—	—	入母屋
	瑞龍寺廻廊	富山	寛文元年	1661	単廊	1	1.970	3.030	梁束式	—	—	入母屋
	石清水八幡宮廻廊	京都	寛永11年	1634	複廊	3	2.227	1.667	虹梁・皿斗	—	—	入母屋
D型	延暦寺根本中堂廻廊	滋賀	寛永17年	1640	複廊	2	2.662	2.282	蝦虹梁	—		寄棟
	京都御所廻廊	京都	嘉永７年	1854	複廊	2	3.857	1.970	虹梁	—	**大斗**	寄棟

網かけ：隅部に３本以上の虹梁が集中し、それら虹梁を大斗が受ける事例

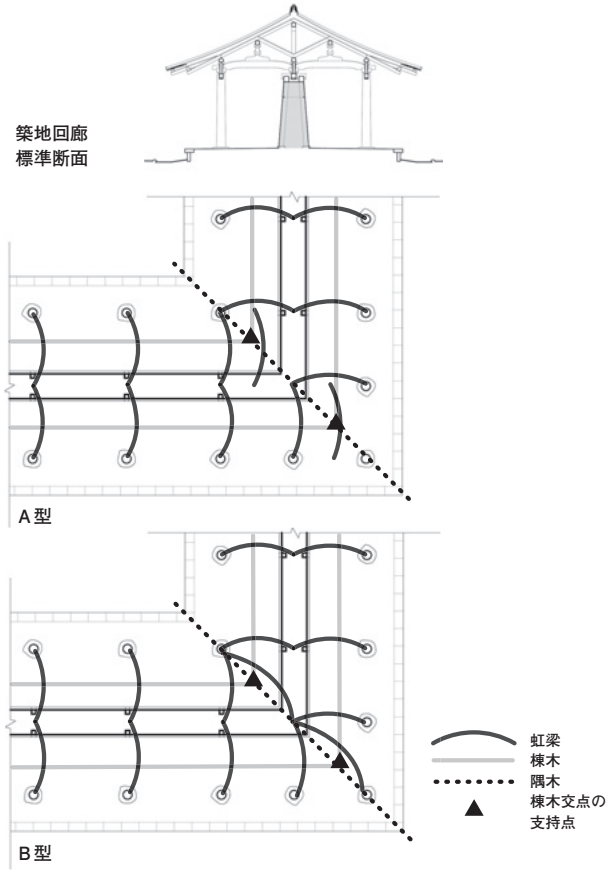

図９　回廊隅部架構復原案

く。隅行虹梁は２本の材を中柱筋隅で継ぐ。

京都御所廻廊では、入隅は隅行虹梁と梁行虹梁を相欠きで組み、梁行虹梁鼻は肘木に造り出すとみられる。

なおいずれの事例も、出隅は枠肘木に隅行虹梁が相欠きで組む。

類例の検討　入隅（および中柱筋隅）での納まりは、梁行虹梁鼻を肘木に造り出す方法と、梁行虹梁とみせかけの肘木を隅行虹梁に取り付ける方法とがみられる。上記４例のうち、前者は平等院鳳凰堂翼廊が、後者は法隆寺東院廻廊が、それぞれもっとも古い事例となる。

架構部材の納まりの復原　以上の検討より、回廊の入

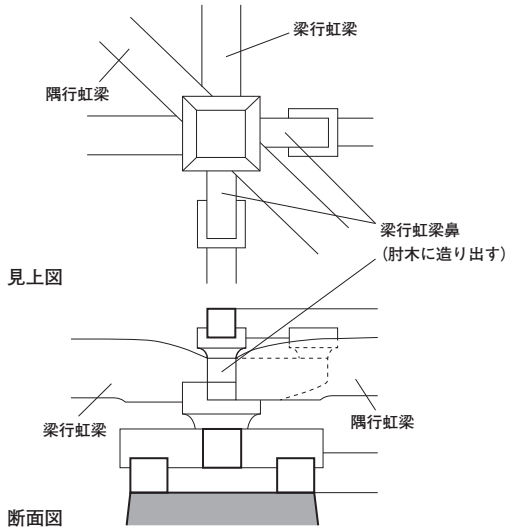

図10　回廊隅部架構部材納まり復原案（築地心隅）

隅および築地心隅での架構部材の納まりを考える。梁行虹梁鼻を肘木に造り出す方法は、回廊以外の建築では前述した唐招提寺金堂にもみられ、奈良時代まで遡る技法である。一方、梁行虹梁とみせかけの肘木を隅行虹梁に取り付ける方法は、古代末期ないし中世以降に現れる技法と考えられ、奈良時代まで遡るとは言い難い。

よって、築地回廊の隅部の部材の納まりは、入隅と築地心隅ともに、梁行虹梁鼻を肘木に造り出して虹梁どうしを組むと考える（図10）。

４　おわりに

築地回廊の隅部に関しては、築地心隅で虹梁等を受ける大斗、ならびに大斗を支える築地上の各部材の納まりの詳細、それに関連して築地隅部の寄柱の有無および配置が、今後の課題として残っている。　**（坪井久子）**

註

１）京都御所廻廊は重要文化財指定建造物ではないが、宮殿建築の参考事例として類例に含めた。